

東京女子医科大学看護学会第9回学術集会 シンポジウム
「看護教育にリベラルアーツはどのように貢献する可能性を持っているか？」

看護教育におけるリベラルアーツ—医療人文学の立場から—

足立 智孝（亀田医療大学看護学部）

1960年代後半に米国において提唱され、現在は世界各地で展開されている、医療人文学（Medical humanities）教育の起源は、20世紀に展開されるようになった医科学的医療と密接に関連する。医療が科学（特に自然科学）と密接に関わるようになったことで、医学教育のカリキュラムも、医科学科目に偏って編成されるようになった。しかし一部の医学教育者たちはこの傾向に対し、人間性を欠く医療者が養成されることになる、医学生の個性を排除した、一律で機械的な教育が行われる、などの懸念を唱え始めた。

この医学教育者たちは、対応策として「価値教育」の必要性を提案した。なかでも Edmund D. Pellegrino は、価値教育の具体的手段として「人文学」の必要性を訴えた¹⁾。Pellegrino は、医学教育の基本には人間の価値を考える教育をおき、医科学領域以外の科目から人間的側面を学ぶことを提案し、リベラルアーツとして人文学科目を取り入れる必要性を強く主張した。

医療人文学教育の目的は、「情緒能力の向上」と「理性能力の向上」の二つに分類される。前者の教育目標は、患者、同僚、自分自身に対する思いやり、感受性、共感性の発達であり、また後者のそれは、倫理的かつ批判的な思考能力の向上である²⁾。このような目的・目標を達成するために、哲学、倫理学、文学、歴史学、人類学、宗教学、芸術などの人文学科目が用いられ、現在では世界各地で展開されるようになっている³⁾。

医学教育で提唱されるようになった1960年代後半には、看護教育における医療人文学教育は、あまり注目されなかった。ケアリングの専門家である看護師を目指す学生は、豊かな人間性を備えていることが前提であると考えられていたのがその理由の一つである。

しかし1980年代に入り、看護教育も医学教育がかつて直面したように、多くの科学・技術的な知識の修得を求められるようになり、自然科学科目を中心としたカリキュラム編成が行われるようになった。そのために人間の複雑さ、あるいは人間性を学ぶ教育が不十分ではないかと考える看護教育者が現れ始めた。看護学から人間的な視点をなくすことは、看護学の学問領域としてのユニークさや看護学領域自体の存在意義を失うことになるとの危機感をもって語られ始めた。21世紀になると、「看護人文学（Nursing humanities）」の言葉が用いられ、看護教育での人文学教育の必要性を論じる研究者も現れるようになっている⁴⁾。

本務校でリベラルアーツを担当する筆者は、学部一年生を対象に文学作品や映画作品を教材に「医療人文学」を開講している⁵⁾。文学作品を題材にする授業では、予めどんな点に注目して読み進めたらいいのか、授業の中で話し合いの中心テーマとなる質問を提示して、十分な予習を求めている。授業では学生にその質問に対する意見表明を促し、意見交換を中心に進めている。たとえばトルストイ著『イワンイリイチの死』を取り上げる授業では、「主人公の痛みや苦痛」の原因が必ずしも身体的なものだけではないことを考えたり、イリイチの死にゆく過程を読み解く中で、「死に対する考え方」を話し合っている。

学生たちのコース履修後の感想には、「『死』『痛み』『苦しみ』について考える機会となった」「人の死や、患者の苦しみについてあまり考えてこなかった」などが書かれ、通常は考えないことを文学作品や映画を通して考える機会となったことがうかがえた。また、「自分が今まで考えたこともないような意見を述べる他の学生の意見を聞くと、一つの事柄に対しても、様々な見方、考え方があることを学んだ」との感想からは、学生が多様な考え方や視座を学ぶ重要性に気づく時間となっていた。「作品中の登場人物を自分や家族と重ね合わせて考えることで、他者の気持ちについて深く学ぶことができた」との意見からは、共感的に他者と接することを学び、さらに近い将来に看護者となった時に、実際の看護実践の中で、共感的態度をどう展開するのかについて自発的に想像して考える時間となっていたようである。

こうした文学を中心にした看護教育実践の中から考えられ得る医療人文学の教育効果としては、学生たちに様々な物事に対する自分の価値観（立場、考え方）を自ら意識化することが考えられる。この「意識化すること」には、「明確な立場をもつ自分を意識化すること」だけでなく、「あまり明確な立場がない自分」や「その特定の事柄については全く考えたことがない自分」を意識化することも含まれる。現在の自分の状況を自ら意識化することは、近い将来に患者やその家族、あるいは他の医療スタッフと関わることになる上での、人間関係を築く上の最も基本的要素になると思われる。ソクラテスが述べたと言われる「汝自身を知れ」との箴言は、人間関係を構築する上での基本的要素に必要であり、その涵養に、医療人文学教育は貢献できるのではないかと考えている。

註

- 1) E. D. Pellegrino, *Humanism and the Physician* (Knoxville, TN: The University of Tennessee Press, 1979), 4.
- 2) D. Self, "The Pedagogy of Two Different Approaches to Humanistic Medical Education: Cognitive VS. Affective," *Theoretical Medicine* 9 (1988): 227-36.
- 3) 以下の文献は、世界各国の医療人文学プログラムを特集している。*Academic Medicine* 78.10 (2003)
- 4) C. Davis, "Nursing Humanities: The Time Has Come," *American Journal of Nursing* 103.2(2003):13.
- 5) 本務校で行っている「医療人文学」については、以下を参照。足立智孝「ナラティブを用いた倫理教育アプローチ」『看護人材教育』第10巻第4号（2013）pp.2-10.